【雑想】チャングム（6）　医女修練・薬毒一如

斉観堂鍼灸・気功治療院　鈴木斉観

『宮廷女官チャングムの誓い』の医女修練の辺り。チャングムは医女修練に合格した。彼女に厳しく当ったシン教授は、実は彼女に期待していたのだった。理不尽なもう一人の教授に落されようとしていた彼女を奇策で救った。合格発表の後、シン教授が経穴人形を抱えて部屋に戻ろうとする場面。チャングムは近づいて、人形を教授の手からそっと自分の胸に抱える。二人は黙り、チャングムは教授に寄り添うように数歩、歩む。――何も語らずとも、二人の心が通じ合っていることが分かる。とても私が好きな場面である。

済州島の医女チャンドクについて医術を学んだチャングムは、特に医学書を頭に叩き込んでいた。どんな症状でどんな脈である時にはどんな病であり、治療に使うツボはどこで、漢方薬は何を使うかを覚えこんでいた。そしてその知識で何人かの患者を治療し、自信を持っていた。

例えば倭寇の首領を診断する場面で、望診し、脈診しただけで腸癰（ちょうよう）だと言っていたのが、私には違和感があった。首領がどのようにして現在の状態になったのかも聞いていなかった。また望診・脈診で腸癰だと推定したならば、患部であるお腹を診て確認する必要があっただろう。済州島での他の治療場面でも、いつも、ほとんど望診・脈診だけで診断をしていた。

医女修練での治療実習でも、チャングムは2人の患者が、黄色い顔で手足が痩せ（望診）、堅脈（脈診）なので、同じ気脹（きちょう）という病だとすぐに診断を下していた。修練生仲間のシンビがからだを触り（切診）、患者に様子を聞いて（聞診）、診察しているのを見て、やっとチャングムは自分の誤診に気がついた。そして反省するわけである。「患者の状態や生活習慣に目を向けず、知識だけに頼っていた」と。シン教授はチャングムが聡明であるからこそ持っているうぬぼれに気付かせたかったのであった。

薬剤の薬と毒との区分を書かせる試験。1回目の試験でチャングムは不合格であった。誤診によって人を殺す事もあるように、薬を間違えても人を殺す事になる。実習での誤診で謙虚になったチャングムはそれに気がついた。2回目の試験で彼女は、「区分できない。病に適していれば薬となり、誤って用いれば毒となる。からだに良いとされる水でさえ、夜中や明け方に飲めば毒になる」と書いた。夜中や明け方にノドが渇けば、お湯を飲めばいい。冷たいビールなど論外である。

シン教授は「巴豆（はず）は冷えの便秘に効くが、熱の便秘に使えば死に至らしめることになる」と補足していた。日本では現在、毒性の強い巴豆は余り使われていない。熱の便秘には、倭寇の首領の治療に必要だった大黄がよく使われている。

実は同じ様なことが、漢方をまともに学ばずに漢方薬を使う医師によっても行われている。漢方では小柴胡湯という薬方は肝臓付近の熱気を持った異常を主な目標として使う。その為に肝臓病である場合も多く、肝臓病に効くと医師たちには思われている。その為に医師は漢方的な診断することなく、冷えの肝臓病の患者に使ってしまい、問題を起しているわけである。

「医者は聡明な人間より深みのある人間が良い」とシン教授は言っていた。聡明でない私は更に学ぶことも必要だが、深みもつけなければいけない。（2008年3月20日）